

氏名	櫻田 怜佳
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第244号
学位授与年月日	2023（令和5）年3月20日
学位授与の要件	日本女子大学学位規程第5条第1項該当
学位論文題目	<b>A Comparative Study of TED Speeches between American English and Japanese: Socio-Culturally Shared Patterns of Public Speaking</b>
論文審査委員	主査 藤井洋子（英文学専攻 教授） 副査 石井倫子（日本文学専攻 教授） 高梨博子（英文学専攻 教授） 片岡邦好（愛知大学文学部 教授）

氏名 : 櫻田 怜佳

学位論文題目 : A Comparative Study of TED Speeches between American English and Japanese:  
Socio-Culturally Shared Patterns of Public Speaking

## 論文の内容の要旨

本研究は、アメリカ英語母語話者（以下、英語母語話者とする）と日本語母語話者のパブリック・スピーチを比較分析した上で、それぞれの言語文化において共有されているスピーチのパターンを明らかにすることを目的としている。

本論文は、8章から構成される。1章では、研究の目的を示した。本研究の出発点は、日本において、英語母語話者のスピーチの方法が模範となる一方で、日本語母語話者のスピーチのパターンは軽視され、その実態が明らかにされていないことに問題意識を持ったことにある。日本では、バラク・オバマ氏（元米国大統領）やスティーブ・ジョブズ氏（Apple 社創業者）をはじめとする英語母語話者のスピーチの方法が賞賛され、学校教育では、英語の方法に則って指導がなされている。多くの研究者は、英語と日本語のスピーチの方法が異なることを指摘しながら、その相違については、日本語母語話者の実践やスキルの不足に起因すると結論づけることが多く、学術的な検討は未だ十分ではない。日本は、「スピーチの文化が欠落している」と否定的に評価されるが、このような見方は適切なのだろうか。日本には、英語とは異なるスピーチのパターンが社会文化に通底している可能性はないのだろうか。このようなリサーチ・クエスチョンを掲げ、本研究では、英語母語話者と日本語母語話者がそれぞれの母語で行うスピーチ（TED Talks）を分析することを通して、日本語母語話者に共有されるスピーチのパターンの特徴を明らかにする。

さらに、第二の目的として、スピーチの相互行為的な性質（interactivity）に着目し、話者は言語使用を通して聴衆とどのような関係を構築しようとしているのかを分析する。従来、スピーチは、話者一人で完結する「モノログ」であると考えられてきた。しかし、実際のスピーチでは、話者は、聴衆に問いかけて応答や挙手を求めたり、聴衆からの拍手や笑いに対して感謝の言葉を述べるなど、聴衆に関わりを示す場面が多く観察される。これらの言語使用は、これまで話者個人の裁量によるものであるとしてスピーチの研究では周辺的に扱われてきたが、本研究では、スピーチはモノログではなく相互行為（interaction）であるということを実証に基づいて明らかにすることを旨とする。

2章では、英語と日本語のスピーチを論じるための基礎として、スピーチとその理論を体系化する「レトリック」の歴史および理論に関する先行研究を概説した。まず、レトリックの歴史的背景については、古代ギリシャにおいて多くの人を「説得」するための方法としてレトリックが誕生したことを説明した。さらに、本研究の分析対象であるアメリカと日本におけるレトリックの受容と発展を概説した。西欧には、古代ギリシャから脈々と受け継がれてきたレトリックおよびスピーチの伝統と確立された理論がある。一方、日本のレトリックおよびレトリック研究は、アメリカから強い影響を受けており、英語のスピーチの研究は豊富だが、日本語のスピーチの解明を試みるものは未だ少ない。次に、アメリカと日本において広く受け入れられているレトリックの理論（作文の構成法）を説明し

た。アメリカの作文は、「主題を示す文」(topic sentence)と「主題に関する情報を補足する文」(support sentence)を持つパラグラフによる構成を基本とし、「序論」・「本論」・「結論」の三部構成が広く知られている。初等教育においては、ジャンルごとに文体の規則が設けられており、決められた文体の中でいかに独創性のある内容の作文を書くことができるかという点が評価される(渡辺, 2004)。一方、日本の作文教育では、厳密な文体の規則は設けられていない。最も一般的な作文の構成は「起承転結」である。この構成に対しては賛否が分かれ、説得力のある文章を書くためには不適切であるという批判(波多野, 1991、野口, 2002、高松, 2003)もある。このように、日本のレトリックは、西欧とは異なることが認識されながら、否定的な評価が与えられてきた。次に、異言語のレトリックを比較する対照修辞学の研究を概観した。対照修辞学の礎といわれるKaplan(1966)は、さまざまな言語話者の英語エッセイの構成を比較し、言語文化によって異なる文章のパターンがあることを主張した。中でも、英語は結論までの道筋が「直線的」なアプローチであり、一方アジアの言語はすぐに結論に向かわない「渦巻き状」の構成であることを指摘している。異言語対照研究としてLeggett(1966)、Hinds(1983, 1987, 1990)、西原(1990)、Scollon and Scollon(1995)を概説し、日本語を含むアジアの言語は、結論を先に示す西欧の言語文化とは異なることが見出されている。

3章では、本研究で使用するデータについて解説した。分析に使用したデータは、TED(Technology, Entertainment, and Design) Talksという世界各地で幅広い職種、年代の人々が登壇し、「広める価値のあるアイデア」を語るスピーチの映像である。英語母語話者と日本語母語話者がそれぞれの母語で行うスピーチを12本ずつ分析した。本データを選んだ理由は、(1)大半のスピーチ研究が扱う政治演説のように競争的な環境で行われるスピーチではなく、話者が自分の経験や知識について自由に話すスピーチを分析すること、(2)TEDのイベントは世界各地において同じ条件の下で行われるため、異言語文化を対等に比較することが可能であることによる。

4章では、本研究で行う2つの観点からの分析の手法を説明した。第一の分析は、スピーチの構成である。ナラティブの構造を明らかにしたLabov and Waletzky(1967)を参考にし、TEDスピーチの構成を分析した櫻田(2018)の手法に基づいて、本研究では、1本のスピーチを構成要素(メインアイデア、主張、エピソード)に分解し、それらの要素がどのように配列されているかを分析した。二つ目は、話者の言語使用に反映されている「意識のモード」である。これはChafe(1994)によって提起された分析的枠組みである。Chafe(1994)は、日常会話において人は2種類の意識に基づいて発話していると考えている。一つ目は、会話が進行する時点において、自己を取り巻く外的環境に意識を向け、「今ここ」に関連することに言及するモード(immediate mode)、二つ目は、発話時に話者の意識が自己の内側に向かい、回想や展望を通して頭の中にある情報を伝えるモード(displaced mode)である。本研究では、Chafe(1994)の2種類のモードだけではなく、スピーチの実態をより正確に説明するために、新たに2つのモードを設定し、合わせて4つのモードを用いて分析した。その4つのモードとは、まず第一に、「情報を伝えるモード」(“displacement mode”)である。このモードでは、発話時に話者の意識が自己の内側に向かい、回想や展望を通して、話者の頭の中にあるアイデアや知識などの情報を提供する。第二に、「情報伝達に軸を置きながら聴衆に関与するモード」

（“displacement-based semi-immediate mode” 以下、D-I mode とする）である。これは、「情報を伝えるモード」（displacement mode）に軸を置きながら、「今ここ」の聴衆に対して意識を向けているモードである。この意識を表すモードは、例えば、次の展開を予告したり、これまでの話を要約したり、重要なポイントを話すということを伝えるなど、談話の流れを整理し、聴衆の理解促進に配慮する言語使用によって客観的に観察することができる。第三のモードは、「聴衆への関与に軸を置きながら情報を伝えるモード」（“immediate-based semi-displacement mode” 以下、I-D mode とする）である。これは、聴衆に関わりを示すモードに軸を置きながら、話者が持つ情報を伝えるモードである。例えば、聴衆の視点に立ち、その時に聴衆が考えているであろうことを代弁したり、話者が話す内容について聴衆が知識や経験を持っているかどうかに関及するような言語表現（例えば、「皆さんも経験があるかと思いますが」「ご存じないかもしれませんが」など）で表される。第四のモードは、「聴衆に関与するモード」（“immediate mode”）であり、これは、「今ここ」の聴衆に対して直接的に関与を示す言語表現において観察されるモードである。例えば、聴衆に質問をし、反応や挙手を求めたり、聴衆からの拍手や笑いに対してその場で感謝の言葉を述べるなどのやりとりがあげられる。スピーチに見られる話者の意識のありようをこれら4つのモードに分類し、話者が情報の提供を志向するか（モノログ）、聴衆と関わることを志向するか（インターアクション）について分析を行った。

5章では、スピーチの構成を分析した。分析の結果、英語と日本語のスピーチの構成には異なる傾向が見られた。英語のスピーチは、(1)「メインアイデア」とそれを理解するために必要な前提情報を示す「序」（“introduction”）、(2)メインアイデアの説得性を補強する「主張」や主張の根拠を裏付ける「エピソード」を提示する「主旨の補強」（“supporting-the-main-idea”）、(3)最後にメインアイデアを示してスピーチを締めくくる「結び」（“ending”）という3つのパートによって構成される。話者は、スピーチの最初にメインアイデアを聴衆に明確に提示し、さらに主張やエピソードを通じて根拠を示して深掘りするように情報を提供しながらスピーチを構築している。すべての要素は、メインアイデアに向かう一本の線上に配列されるかのように、内容の関連が明白な状態で進むよう構成されている。話者は、目的地（メインアイデア）を明示し、まるで聴衆を先導する「リーダー」のような存在になる。

一方、日本語のスピーチは、(1)後に語られるエピソードを理解するために必要な知識が提示される「序」（“introduction”）、(2)エピソードが次々に展開される「展開部」（“development”）、(3)スピーチを締めくくる「結び」（“ending”）という3つのパートで構成される。スピーチの全体または大部分が「エピソード」で構成されていた。特筆すべき点は、メインアイデアが最後まで明確に示されないことにある。聴衆にとっては、進行中のエピソードが次のエピソードまたはメインアイデアとどのように関連しているのかを自分で推測しながら話を聴くことになる。最初からメインアイデアが与えられるのではなく、話者が話すさまざまなエピソードを聴きながら、話者がメインアイデアを得るに至った過程を聴衆も追体験して共有することが期待されており、結果的に、話者から提供された多くのエピソードを通して、話者が伝えようとするものが聴衆の内から自然に湧きあがり理解されていくという構成になっていた。このような構成を通して、話者

は、目的地に向かう道のりを聴衆と歩幅を合わせて同行する「パートナー」のような存在となっていた。

6章では、「話者の意識のモード」(modes of the speaker's consciousness)を分析した。分析の結果、言語に関わらずすべてのスピーチにおいて、話者は情報を提供するだけでなく、聴衆に関与を示す言語表現を用いていることが観察された。このことから、スピーチは、話者一人で完結するモノログではなく、スピーチの中に聴衆を引き込みながら行うインターアクションであると結論づけることができる。

英語スピーチは、80.7%を占める大部分において、情報を聴衆に提供する「情報を伝えるモード」(displacement mode)で進められていた。次に頻度が高いモードは、談話の流れを整理して、聴衆の情報処理を容易にすることを志向している「情報伝達に軸を置きながら聴衆に関与するモード」(D-I mode)であった。これらの表現は「連結語」(“connectives”)と呼ばれ、話者と聴衆の「思考の間を埋める」(Lucas, 1983/2012:177)ことに寄与する。すなわち、知識を有する話者がその知識を持たない聴衆に向けて情報を与えるという関係が作られ、時には、知識量の差から生じる「思考の間」を埋めながら、まるで「リーダー」のように目的地に聴衆を先導する様子が観てとれた。

日本語スピーチは、「情報を伝えるモード」(displacement mode)は全体の52.1%であった。次に頻度が高いモードは、I-D modeで36.5%を占め、これは英語スピーチ(5.9%)の約6倍の値である。「聴衆への関与に軸を置きながら情報を伝えるモード」(I-D mode)では、聴衆が考えているであろうことを代弁したり、聴衆の経験や知識に言及する表現や、聴衆の存在を強く意識していることを示す終助詞「ね」や文末の「んです」などの統語的特徴によって、話者が聴衆の存在を強く意識していることが観察された。これらは、聴衆に意識を向けていることを知らせながら、話者は「パートナー」のように聴衆に同調(synchronize)し、協調(cooperate)を促していると理解できる。

7章では、6章までの分析の結果をもとに、話者が聴衆との関係をどのように構築しているかを論じた。英語母語話者は、伝えたいことを明確に提示し、目的地まで聴衆を先導するリーダーのような存在として自分を位置づけ、スピーチを進めている。一方、日本語母語話者は、目的地までの道のりを聴衆と同行するパートナーのような存在として位置づけ、スピーチを進めていると捉えられた。

さらに、本研究の出発点である「日本語母語話者には、社会文化的に共有されたスピーチのパターンが本当はないのか」という問いに対し、日本語母語話者に共有されるスピーチのパターンがあり、3つの特徴があることを論じた。まず第一に、日本語母語話者は、スピーチ全体を通して聴衆との繋がりを持ち続けることである。話者が聴衆に関わりを示し、協調を図りながらスピーチを行う特徴は、二者間の会話の研究でも指摘されている。水谷(1993)によれば、日本語会話は、話し手と聞き手が共に作り上げる「共話」である。また、藤井(2018)によれば、会話参加者は互いに「同調(synchronize)」および「協調(cooperate)」しながら共に会話を構築する。参加者は、他者と一体となり、「全体の中の部分」として話す(植野, 2016)。これら日本語会話における顕著な特徴は、本研究のスピーチにおける話者と聴衆の関係でも同様に観察された。

第二の特徴は、話者がメインアイデアを明確に述べて聴衆に伝えるのではなく、聴衆一

人一人が自分の内側から導き出すことができるような「間」を作ることによって伝えていくという過程を経ることである。南（1983）は、「間」とは、物理的・生理的なプロセスではなく、形やことばで表現することができない経験であり、西洋のコンテクストでは明確に対応するものはないと指摘している。全てを明らかにせずに、相手が想像する「間」を残すことは、聴衆が自分の内側から自然に湧き出てくるものを捉えて理解するための余白を提供していることでもあり、日本語スピーチの話者は、そのようなあり方に価値を見出していると読み取ることができた。その上で、話者は、聴衆が「おのずから」スピーチのメインアイデアを把握することができるように、さまざまな情報（エピソード）を提供していると考えられる。つまり、日本語のスピーチでは、話者の伝えたいことは、聴衆が自分の内側から自然に「おのずから」生み出すものであり、そのようなあり方に重きを置いて（竹内、2012）語られるといえる。

第三の特徴として挙げられることは、エピソードの展開である。一つひとつのエピソードは、最初はメインアイデアや他のエピソードと関連がないように思われ、独立した「点」のようだが、スピーチが進むにつれて、それらが「線」で結ばれるように緩やかな繋がりを持ち始める。そして、すべてのエピソードが提示され、スピーチが終結すると、集まったエピソードは一つの大きな「面」を形成し、その全体を通して、聴衆はメインアイデアを把握することができるという構造をもっている。この特徴は、日本の社会文化に根付く「縁起」という概念に関連を見出すことができる。「縁起」は、物事はさまざまな要素が相互に関連して成り立っているとする仏教に由来する概念である。スピーチにおいて、一つのエピソードは複数のエピソードとの間に緩やかな繋がりを持つ。聴衆は、その繋がりを前進的に期待し、遡及的に理解するのである。このように、徐々にエピソードの繋がりが明らかになり、最終的には自分でメインアイデアを掴み取るという構成は、日本の聴衆の知的好奇心を刺激し、聴衆は謎解きをするかのようにスピーチを楽しむと考えられる。

最終章では、本研究の意義と限界に加え、今後の展望を述べた。対照修辞学をはじめとする言語研究において、日本語の文章は「渦巻き状」（Kaplan, 1966）で、「西欧の読者から見れば不可解」（Leggett, 1966）と表現され、スピーチも同様に、「スピーチの文化が欠落している」「劣っている」と否定的に評価されてきた。多くの日本語母語話者も、日本語のスピーチがどのようなものであるかを自覚することなく、ただ盲目的に英語のスピーチの方法を学んでいるという現状があった。しかし、本研究で得られた結果をもとに、日本語母語話者が自分の言語文化のスピーチのありようを十分に理解し、日本語母語話者としてのアイデンティティを持ちつつ、国際社会において、いかにして日本語母語話者らしいスピーチで人を説得できるかを追究していくことが、「欠落している」といわれてきた日本のスピーチとレトリックを考える上での次なる重要な課題といえるだろう。

#### 参考文献

Chafe, Wallace. (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: The flow and displacement of conscious experience in speaking and writing*. Chicago: University of Chicago Press.

藤井洋子 (2018) 「個を基体とする言語行動」と「場を基体とする言語行動」-英語・中国語・日本語・韓国語・タイ語の比較より- 社会言語科学, 21 (1): 129-145.

- 波多野完治 (1991) 現代のレトリック. 小学館.
- Hinds, John. (1983) "Contrastive rhetoric: Japanese and English." *Text* 3: 183-195.
- Hinds, John. (1987) "Reader versus writer responsibility: A new typology." In U. Connor, and R. Kaplan (eds.), *Writing across languages: Analysis of L2 texts* (pp. 141-152). MA: Addison-Wesley.
- Hinds, John. (1990) "Inductive, deductive, quasi-inductive: Expository writing in Japanese, Korean, Chinese and Thai." In U. Connor and A. Jones (eds.), *Coherence in writing* (pp. 81-109). Alexandria Virginia: TESOL.
- Kaplan, Robert. (1966) "Cultural Thought Patterns in Intercultural Education." *Language Learning* 16: 1-20.
- Labov, William, and Joshua Waletzky. 1967. "Narrative analysis: Oral versions of personal experience." *Journal of Narrative and Life History* 7: 3-38.
- Leggett, Anthony. (1966) "Notes on the writing of scientific English and Japanese physics." *The Physical Society of Japan* 21, 11: 790-805.
- Lucas, Stephen E. (2012) *The Art of Public Speaking*. New York: McGraw-Hill. (Original work published 1983)
- 南博 (1983) 間の研究-日本人の美的表現. 講談社.
- 水谷信子 (1993) 「共話」から「対話」へ. 日本語学 12 (4), 4-10.
- 西原鈴子 (1990) 日英対照修辞法. 日本語教育 72: 25-41.
- 野口悠紀雄 (2002) 「超」文章法-伝えたいことをどう書くか. 中公新書.
- 櫻田怜佳 (2018) TED Talks における語りの構成と言語表現の日本語・英語対照研究-スピーチに見られる語り手と聴衆の関係-. 社会言語科学, 21 (1): 191-206.
- Scollon, Ron and Susan Wong Scollon. (1995) *Intercultural Communication: A Discourse Approach*. West Sussex: Brackwell Publishing Ltd.
- 高松正毅 (2003) 「文章表現技術」の理論確立に向けて. 高崎経済大学論集, 45 (4): 175-183.
- 竹内整一 (2012) 「おのずから」と「みずから」のあいまい-科学技術の基礎倫理. 計測と制御, 51 (11): 1046-1051.
- Ueno, Kishiko. (2016) *Speaking as Parts of a Whole: Discourse Interpretation from Ba-based Thinking*. Doctoral Dissertation, Department of English, Japan Women's University, Tokyo.
- 渡辺雅子 (2004) 納得の構造-日米初頭教育に見る思考表現のスタイル. 東洋館出版社.

氏名 : 櫻田 怜佳

学位論文題目 : A Comparative Study of TED Speeches between American English and Japanese: Socio-Culturally Shared Patterns of Public Speaking

### 論文審査結果の要旨

上掲委員による審査委員会は、櫻田怜佳氏（以下、著者）より提出された博士学位申請論文“**A Comparative Study of TED Speeches between American English and Japanese: Socio-Culturally Shared Patterns of Public Speaking**”（以下、本論文）について審査し、以下のような結論を得たので、報告する。

#### 論文の内容の要旨

本論文は、アメリカ英語母語話者と日本語母語話者のパブリック・スピーチを比較分析する実証研究を通して、各言語文化に共有されているスピーチのパターンを明らかにするものである。本研究は、日本において英語母語話者のスピーチが賞賛され、その方法が模範となる一方で、日本語母語話者のスピーチのパターンは軽視され、その実態が明らかにされていないことに問題意識を持ったことが発端である。そこで第一に、日本には英語とは異なるスピーチのパターンが社会文化に根付いている可能性を探ることを目的としている。さらに、第二の目的として、スピーチの相互行為的性質に着目することによって、話者がスピーチを通して聴衆とどのような関係を構築しようとしているのかを分析する。これまでスピーチは話者一人で完結するモノログに範疇化されてきたが、本研究では、スピーチはインターアクションの性質を強く持つことを主張する。

本論文は、全文 232 ページ（本文 217 ページ、参考文献 16 ページ）であり、構成は、以下の通りである。

#### Chapter 1 Introduction

##### 1.1. Aims of the study

##### 1.1.1 Socio-culturally shared pattern of public speaking for Japanese people

##### 1.1.2 Interactive aspects of public speaking

##### 1.2. Data

##### 1.3. Outline of the study

Chapter 2	Theoretical Background
	2.1. Introduction
	2.2. Studies of rhetoric: A historical perspective
	2.2.1 The root of rhetoric in Ancient Greece
	2.2.2 The acceptance and development of rhetoric in the United States
	2.2.3 The acceptance and development of rhetoric in Japan
	2.3 Studies of rhetoric: A theoretical perspective
	2.3.1 The rhetoric accepted in the English-speaking world
	2.3.1.1 Elements of rhetoric in English
	2.3.1.2 The English composition method
	2.3.2 Theoretical studies of rhetoric in Japanese
	2.3.2.1 Elements of rhetoric in Japan
	2.3.2.2 The Japanese composition method
	2.4 Differences in rhetoric by language and culture
	2.4.1 Contrastive linguistics
	2.4.2 Contrastive rhetoric
	2.4.3 Contrastive rhetoric in American English and Japanese
	2.5 An overview of studies on public speaking
Chapter 3	Data
	3.1 Introduction
	3.2 Overview of TED Talks
	3.3 Intention to use TED Talks in the present study
	3.4 Data used in this study
Chapter 4	Methods of Analysis
	4.1 Introduction
	4.2 Structure of speeches
	4.2.1 Structure of discourse in Labov and Waletzky (1967)
	4.2.2 Structure of speeches in Sakurada (2018)
	4.2.3 Structure of speeches in the present study
	4.3 Modes of the speaker's consciousness
	4.3.1 Modes of the speaker's consciousness in public speaking
	4.3.2 Modes of speaker consciousness in Chafe (1994)
	4.3.3 Modes of the speaker's consciousness in the present study
Chapter 5	Structure of Speeches

- 5.1 Introduction
- 5.2 Speeches delivered by native speakers of American English
  - 5.2.1 Analysis of the speech on security delivered by James Stavridis
  - 5.2.2 Analysis of the speech on power posing delivered by Amy Cuddy
  - 5.2.3 Analysis of the speech on fear delivered by Karen Thompson Walker
  - 5.2.4 Summary of structures of English speeches
- 5.3 Speeches delivered by native speakers of Japanese
  - 5.3.1 Analysis of the speech on *urushi* delivered by Kazumi Murose
  - 5.3.2 Analysis of the speech on the soil-free cultivatable film delivered by Yuuichi Mori
  - 5.3.3 Analysis of the speech on artificial spider silk delivered by Kazuhide Sekiyama
  - 5.3.4 Summary of structures of Japanese speeches
- 5.4 Summary of Chapter 5

Chapter 6 Modes of the Speaker's Consciousness

- 6.1 Introduction
- 6.2 Four modes of the speaker's consciousness in delivering a speech
- 6.3 Language use in the four modes when delivering a speech
  - 6.3.1 Language use in the displacement mode
  - 6.3.2 Language use in the D-I mode
  - 6.3.3 Language use in the I-D mode
  - 6.3.4 Language use in the immediate mode
- 6.4 Frequency of the four modes in speech
- 6.5 Shifting the four modes in a speech
- 6.6 Summary of Chapter 6

Chapter 7 Socio-Culturally Shared Patterns of Speeches in American English and Japanese

- 7.1 Introduction
- 7.2 Relationship with the audience formed by the speaker
- 7.3 Socio-culturally shared patterns of Japanese speeches
  - 7.3.1 Constant interaction with the audience

### 7.3.2 Creation of a margin for the audience to acquire the speaker's ideas on their own

### 7.3.3 Organization of the speech to reveal the whole picture by connecting each episode as if forming a surface from dots

## 7.4 Summary of Chapter 7

## Chapter 8 Conclusion

### 8.1 Overview of this study

### 8.2 The significance and limitations of this study

### 8.3 Concluding remarks

## References

第 1 章では、前述した 2 つの研究の目的を示した。

第 2 章では、スピーチとその理論を体系化するレトリックの歴史的・理論的背景について先行研究を概説した。古代ギリシャで「人を説得するための方法」として誕生したレトリックは、西欧において現在まで脈々と受け継がれている。一方、日本は、「レトリックの欠如」などと否定的に説明されることがある。対照修辞学では、欧米の人々の文章は結論を先に示す傾向があるのに対して、日本語を含むアジアの言語は結論を後半に置く「遠回り」な文章構成を選択する傾向があることが見出されていることを説明した。

第 3 章では、本研究のデータについて解説した。分析に使用したデータは、「TED (Technology, Entertainment, and Design) Talks」という幅広い職種、年代の人々が登壇し、「広める価値のあるアイデア」を語るスピーチの映像である。英語母語話者と日本語母語話者がそれぞれの母語で行うスピーチを 12 本ずつ分析した。本データを選んだ理由は、(1) 話者が自分の経験や知識について自由に話すスピーチであること、(2) TED のイベントは世界各地で同一の条件のもと行われるため、異言語の対等な比較が可能であることによる。

第 4 章では、本研究で行う 2 つの分析の手法を説明した。第一の分析は、スピーチの構成である。ナラティブの構造を明らかにした Labov and Waletzky (1967) を参考にし、1 本のスピーチを構成要素(メインアイデア、主張、エピソード)に分解し、それらがどのように配列されているかを分析した。第二の分析は、話者の言語使用に反映されている「意識のモード」である。会話における 2 種類の意識のモードを提示した Chafe (1994) を参考にし、本研究では、スピーチの実態をより正確に説明するために 2 つのモードを加え、合わせて 4 つのモードを用いて分析した。第一に、「情報を伝えるモード」(“displacement mode”)である。このモードでは、発話時に話者の意識が自己の内側に向かい、回想や展望を通して情報を提供する。第二に、「情報伝達に軸を置きながら聴衆に関与するモード」(“displacement-based semi-immediate mode” 以下、D-I mode とする)である。これは、「情報を伝えるモード」に軸を置きながら、自己の外的環境である「今ここ」の聴衆に意識を向けるモードである。この意識を表すモードは、例えば、次の展開を予告したり、重要なポイントであることを伝えるなど、談話の流れを整理し、聴衆の理解促進に配慮する言語使用によって客観的に観察することができる。第三に、「聴衆への関与に軸を置きな

から情報を伝えるモード」(“immediate-based semi-displacement mode” 以下、I-D mode とする)である。これは、「聴衆に参与するモード」に軸を置きながら、話者が持つ情報を伝えるモードである。例えば、聴衆が考えているであろうことを代弁したり、聴衆が知識を持っているかどうかに言及するような表現で表される。第四のモードは、「聴衆に参与するモード」(“immediate mode”)であり、このモードでは、話者の意識は「今ここ」に向けられ、聴衆に直接的に参与する。例えば、質問をして聴衆から反応を求めたり、聴衆の拍手や笑いに対して感謝の言葉を述べるやりとりがあげられる。スピーチに見られる話者の意識のありようをこれら4つのモードに分類し、各モードの言語使用、使用頻度、遷移方法を分析することを通して、話者が情報の提供を志向するか(モノログ)、聴衆と関わることを志向するか(インターアクション)について分析を行った。

第5章では、スピーチの構成を分析した。分析の結果、英語と日本語のスピーチの構成には異なる傾向が見られた。英語スピーチは、(1)メインアイデアとそれを理解するために必要な前提情報を示す「序」(“introduction”)、(2)メインアイデアの説得性を補強する「主張」や主張の根拠を裏付けるエピソードを示す「主旨の補強」(“supporting-the-main-idea”)、(3)最後にメインアイデアを示してスピーチを締めくくる「結び」(“ending”)という3つの部分によって構成される。話者は、スピーチの最初にメインアイデアを明確に提示し、さらに主張やエピソードを通じて根拠を示して深掘りするように情報を提供しながらスピーチを構築している。すべての要素は、メインアイデアに向かう一本の線上に配列されるかのように、内容の関連が明白な状態で進むよう構成されている。話者は、目的地(メインアイデア)を明示し、まるで聴衆を先導する「リーダー」のような存在になる。

一方、日本語スピーチは、(1)後に語られるエピソードを理解するために必要な知識が提示される「序」(“introduction”)、(2)エピソードが次々に展開される「展開部」(“development”)、(3)スピーチを締めくくる「結び」(“ending”)という3つの部分で構成される。スピーチの全体または大部分がエピソードで構成されていた。特筆すべき点は、メインアイデアが最後まで明確に示されないことにある。聴衆は、話者が話すさまざまなエピソードを聴きながら、話者がメインアイデアを得るに至った過程を追体験して共有することが期待されており、結果的に、話者から提供された多くのエピソードを通して話者が伝えようとするものが聴衆の内から自然に湧きあがり理解されていくという構成になっていた。このような構成を通して、話者は、目的地に向かう道筋を聴衆と歩幅を合わせて同行する「パートナー」のような存在となっていた。

第6章では、意識のモードを分析した。分析の結果、両言語ともにすべてのスピーチにおいて聴衆に参与を示す言語使用が観察された。このことから、スピーチは話者一人で完結するモノログではなく、スピーチの中に聴衆を引き込みながら行うインターアクションであると結論づけることができる。

英語スピーチは、80.7%を占める大部分が「情報を伝えるモード」で進められていた。次に頻度が高いモードは、談話の流れを整理して、聴衆の情報処理を容易にすることを志向する「情報伝達に軸を置きながら聴衆に参与するモード」であった。話者と聴衆の「思考の間を埋める」(Lucas, 1983:177)ことに寄与する連結語(connectives)の使用により、時には、知識量の差から生じる思考の間を埋めながら、まるで「リーダー」のように目的地に聴衆を先導する様子が観てとれた。

日本語スピーチは、「聴衆への関与に軸を置きながら情報を伝えるモード」が 36.5%を占め、これは英語(5.9%)の約 6 倍の値であった。このモードの使用によって聴衆に意識を向けていることを知らせながら、話者は「パートナー」のように聴衆に同調(synchronize)し、協調(cooperate)を促していると理解できる。

第 7 章では、6 章までの分析の結果をもとに、話者が聴衆との関係をどのように構築しているかを論じた。英語母語話者は目的地まで聴衆を先導するリーダーのような存在として、日本語母語話者は目的地までの道のりを聴衆と同行するパートナーのような存在として自分を位置づけ、スピーチを進めていると捉えられた。さらに、本研究の出発点である「日本の社会文化に根付いているスピーチのパターンの可能性」について、日本語母語話者に共有されるスピーチのパターンを 3 つの特徴を挙げて論じた。第一の特徴は、話者がスピーチ全体を通して聴衆との繋がりを持ち続けることである。話者が聴衆に協調を図りながらスピーチを行う特徴は、二者間会話の研究においても顕著な特徴として指摘され、同様の傾向が見られる。

第二に、話者はメインアイデアを最初に提示するのではなく、聴衆一人一人が自分の内から自然に湧き出てくるものを捉えてメインアイデアを理解するために、「間」を作りながら伝えるという過程を経ることである。このことから、日本の話者は、聴衆が「おのずから」把握することに価値を見出していると読み取ることができた。

第三は、エピソードの展開である。一つひとつのエピソードは、最初はメインアイデアや他のエピソードと関連がないように思われ、独立した「点」のようだが、スピーチが進むにつれて、それらが「線」で結ばれるように緩やかな繋がりを持ち始める。そして、スピーチが終結すると、集まったエピソードは一つの大きな「面」を形成し、その全体を通して、聴衆はメインアイデアを把握することができるという構造を持つ。この特徴は、物事はさまざまな要素が相互に関連して成り立っているとする仏教に由来する「縁起」という概念に関連を見出すことができる。スピーチにおけるエピソード展開とそれによって聴衆が自分でメインアイデアを掴み取るという構成は、日本の聴衆の知的好奇心を刺激し、聴衆は謎解きをするかのようにスピーチを楽しむと考えられる。

第 8 章では、本研究の意義と限界に加え、今後の展望を述べた。日本のスピーチは否定的な評価を受けてきた。多くの日本語母語話者は、日本語のスピーチがどのようなものであるかを自覚することなく、ただ盲目的に英語のスピーチの方法を学んでいるという現状があった。しかし、本研究で得られた結果をもとに、日本語母語話者が自分の言語文化のスピーチのありようを十分に理解し、日本語母語話者としてのアイデンティティを持ちつつ、国際社会において、いかにして人を説得できるかを追究していくことが、「欠落している」といわれてきた日本のスピーチとレトリックを考える上での次なる重要な課題といえると考えられる。

## 論文審査の要旨と結果

審査委員会では本論文の積極的に評価できる学術的価値として以下の見解が表明された。

本研究は、これまで主として政治家の演説を対象としてきたパブリックスピーチの研究に対

し、打ち負かす相手が不在でアイデアを自由に伝える趣旨である TED Talks を取り上げた点に新規性が認められる。さらに、西欧で誕生した「パブリックスピーチ」について、レトリックを出発点とするアリストテレス以来の膨大な先行研究を概観したうえで、特に聴衆の存在を視野に入れた相互行為的 (interactive) な側面に焦点を当て、丁寧なデータ分析から、(1) 絶えず聴衆との相互行為を意識したスピーチ、(2) 聴衆自ら話の内容を経験してもらえよう間合いを与える、(3) エピソード提供により、点から線、線から面へとつなげる構造、という日本語のスピーチに顕著にみられる特徴を抽出している点において、博士論文に値する独創性があるとの評価を得た。

まず、本研究の方法論として、その有効性が広く認められた 2 つの談話過程モデルを中心に、談話研究全般に貢献しうる汎用性のあるモデルを提案した上で、従来のモデルの援用に終わることなく、そこに筆者の考察と問題意識を盛り込んだ改訂を加え、両モデルで扱いにくかった現象について、さらなる考察を深めているところに創造性と独創性が認められる。これらの方法論を用い、本研究の第一の目的である「日本には英語とは異なるスピーチのパターンが社会文化的に根付いている」可能性について、スピーチの構造を綿密に分析し、日英語のスピーチ (ひいては談話) におけるレトリックの特徴を明瞭に浮かび上がらせ、「スピーチの文化が欠落している」という日本への否定的評価に対して明確に提示できるパターンを見いだしたことは高く評価できる。また、第二の目的である「スピーチの相互行為的性質に着目し、話者と聴衆との関係を明らかにする」ことについても、話者の意識のモードに着目し、英語話者の「リーダー」的、日本語話者の「パートナー」的な聴衆との関係を明確に提示し、日本語スピーチのパターンを明らかにしている点でも新しい発見として独自性が認められる。

さらに、本研究は、これらの実証研究によって明らかにされた日英語のスピーチのパターンの異同にとどまらず、特に日本のスピーチの背後にある社会文化的要素を探ることに果敢に挑戦している。その結果、日本語のスピーチでは「間」や「余白」が、聴衆が自ずから結論を導き出す重要な要素となっていること、また、スピーチの構成要素が「点」から「線」「線」から「面」を形成していることを炙り出し、その点について、「縁起」の概念との類推による説明を試みている点も注目すべき点である。

このように、本論文が、日本語のスピーチに通底したパターンがあるということを出出するにとどまらず、それらの背景に存すると思われる社会文化的特徴まで掘り下げ、英語以外の多様な言語文化の一つである日本語において「レトリックが欠落しているわけではない」有り様を提示した意味は大きい。さらに、日本語教育・英語教育における作文指導やプレゼンテーション指導などにも援用できる有益な知見を提供した本論文の意義と貢献は評価に値するものである。

以上、本論文の評価すべき主要な点をあげたが、審査委員会では以下のような指摘がなされた。まず、データについて、西洋由来の TED Talks を取り上げているが、日本の風土に根ざした伝統的な語りを取り上げることを射程に入れても良かったのではないかと。また、方法論としては、本論文で採用された両分析モデル以降に発展してきている談話の構成要素や談話プロセスの

考察についての理論的展開と知見への言及は、今後論文の刊行を目指す際には留意すべき点である。さらに、分析は意味内容が中心であり、スピーチの形式的な言語的特徴については更なる分析を行うことが求められるのではないか。レトリックの比較において、先行研究における書き言葉のレトリックや思考パターンを参考にしているが、話し言葉であるスピーチによるレトリックや思考パターンと区別せずに扱ってもよいのだろうかという疑問も提示された。さらに、日本語のスピーチの社会文化的背景について、「間—余白—」や「縁起」という概念をもって解釈を試みているが、その根拠が薄弱であり、やや乱暴とも思える点が見受けられる。これについては今後、日本文学におけるこれまでの知見などを参考に、より慎重で明確な根拠を示す姿勢が求められるとの指摘がなされた。

2022年11月6日に開催された公開審査会においては、上記の指摘の他に、パブリックスピーチは「モノログではなく相互行為的」というより、むしろ「モノログでありながら、同時に相互行為的」であるとは言えないか。日本語スピーチでは、話者がパートナーというより、聴衆の方にパートナーであることを求めているのではないか。データの性質上、マルチモーダルな映像分析も必要ではないか、などの質疑応答が展開された。なかでも著者が論文の最後に、「日本人が社会文化的に共有するスピーチパターンを十分に理解し、国際社会でどのようなアイデンティティを持ったスピーチを行い、相手を説得できるかを考えることが重要である」と述べている点についての具体的な考えの提示が求められた。これに対して著者からは、直ちに明確な回答をすることは難しいながら、今後多くの機会において日本からの発信が求められ、自身も発信を続けていく旨の意志が述べられた。論文著者は、提示された一つ一つの質問や指摘に対し、真摯に、丁寧に自己の主張を述べており一定の説得力があり十分に評価できるものであった。総じて、著者の地道な研究態度が分析の随所から伺え、とりわけ、データを正確に書き起こし、精緻に読み込み、その構成要素を多角的に分析した姿勢は高く評価できる。1篇のデータ分析でさえ多大な労苦を伴うところ、日英語合わせて24篇の映像データを丹念に分析し、そこから各言語に共通するレトリックのパターンを帰納的に見出そうとする意欲は賞賛すべきものである。その分析から導き出された結論は、談話分析の域を超えてさまざまな語用論的議論に応用が可能な提案となっていると高く評価された。

以上の審査結果を総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が課程博士学位論文に相応しいものであると評価し、博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論を得たことをここに報告するものである。